

ダイアン・アーバス論

—猶予的発話、越境、そして対顔—

李珍鎬

本論文は、アメリカの写真家ダイアン・アーバス（Diane Arbus, 1923-1971）の1950年代後半から1971年までの作品群を分析する。分析の目的は、撮影手法に加え撮影者と被写体の関係性に影響されうる写真表象、そしてその表象を受容する観者の写真経験を分解し、被写体への観者の視線＝価値判断がどう生成されるかを解明することである。

アーバスに関する主要な先行研究は、第一にアーバスの技法の研究、その人物像の究明など彼女に関する一次研究、第二に写真に表象された被写体の受容の様態に関する研究に大別できる。前者には、現存するアーカイブに関する報告、アーバスの発言が確認できる史料、彼女の家族や知人の証言を基にした年代記、そして撮影手段の分析などが含まれる。後者には、被写体の表象を通して、被写体と観者の関係、観者の自意識を喚起する身体の見世物化を考察する研究、そして時代的文脈に照らし合わせた身体イメージの政治性を分析する研究などが挙げられる。

上記の先行研究を踏まえ、本研究は次の分析・考察を行う。撮影にはアーバスのイデオロギーが投影されうると仮定した上で、その手法とそれによる写真を分析すること。さらに、その分析から見出せる撮影者と被写体の関係性が、観者の写真経験に与える影響を考察すること。すなわち、撮影－現像－鑑賞に至る全過程を解体することで、撮影者によって形作られる表象、被写体が自らを表す姿、そして観者が読み取る被写体像、これら三つの像の間の差異を分析する。

そこで本研究は、アーバスの撮影手法は被写体像をどのように構築し、観者にその被写体像をどう読み取らせるかを主要な問いとして提起する。そしてこの問いを三つに分け、各章において分析・考察する。第一章では、アーバスの撮影手法はどういうもので、それが被写体像をどう構築するかを問う。これを通して、その手法が観者の写真経験にもたらす作用を検討する。第二章では、被写体への撮影者の態度は作品上にどのように現れるかを、作品やアーカイブ資料などを基に分析し、両者の関係性が観者の写真経験を複雑化する過程を描出する。第三章では、前章で確かめた両者の親密な関係性が、一方で暴力性も帯びうる可能性に注目する。その親密性と暴力性を帯びた両面的画面と向き合っ、観者は被写体との関係をどう構築しうるか、本章では考える。その過程を追うことで、写真に対峙する観者の経験を分析する。

上記の問いを明らかにするために、本研究は次のような方法を取る。第一章では、写真はキャプションを含めて成立することを指摘した上で、アーカイブ資料を基に、写真の管理者や編集者など外部の介入によってキャプションが変わりうる事例を取り上げ、キャプションに注目する根拠を裏付ける。そのあと、キャプションが被写体の描写にどう影響し、またそれが観者の写真経験にどう作用するかを考察する。第二章と第三章では、史料や伝記などアーバスに直接関連する一次資料を参照して被写体に対する撮影者の考えを推察する。また、撮影者と被写体の関係性が作品に現れる様子を、キャプションを含む分析とともに、物質的側面も扱うことで示す。特に第二章では、被写体に対する撮影者－被写体－観者各々の思考の差を、観者の表象受容の過程の分析を通して図式化し、考察する。第三章では、写真経験の現象学的記述を通して撮影者と被写体の関係性をさらに掘り下げる。その関係性から観者にもたらされる写真経験は、単に被写体との対峙ではなく、画面全体との対峙によることを論ずる。

本論文の構成は次の通りである。

第一章 猶予的発話

被写体像は、アーバスの写真制作の過程を経て構築される。観者の視線＝価値判断は、アーバスの手法を経てこそ成立するのだ。その手法の一つ

にキャプションが挙げられる。最初にキャプションは、関係者の判断やミス、もしくは掲載メディアによって異なる場合があることを確認し、キャプションの相異により同一画像が違った経験を生み出すことを指摘する。次にキャプションの不一致が散見されるにもかかわらずアーバスの作品を鑑賞する際にキャプションが不可欠であることの根拠を示すために、画像とキャプションの補完関係を考察する。そのためにヴァルター・ベンヤミンの写真理論とジョルジュ・ディディ＝ユベルマンの議論を参照する。各議論を通して、キャプションが写真読解の方向を呈示しうる可能性と、画像単独ではその内容を信頼することも疑うこともできず、写真経験が不完全化するという画像の意味の脆弱性を明らかにする。

被写体への視線＝価値判断の内実を観者に自覚させる要素の一つは、表象の意味の変容プロセスに認められる。その変容プロセスは、キャプションの内容と画像の内容のずれから生ずる交錯運動による。そのプロセスを辿るために、まず交錯運動のもたらす写真経験を現象学的に記述する。しかし写真経験の内実をより詳細に明らかにするには、現象学的記述につきまとう主観性を克服する必要がある。この問題を解決するため、ロラン・バルトの記号学的方法を導入する。その方法で明らかになるのは、写真経験は二つの次元においてなされるという点である。本論文はその二つを、それぞれ「通時的次元」と「同時代的次元」と呼ぶ。つまり写真には、時代を超えて理解できる「通時的次元」と、時代的・文化的断絶によって理解が表層化する「同時代的次元」があることを明らかにする。特に異なる時代・文化の観者が「同時代的次元」を表層的にししか理解できない際に、キャプションがその理解をより深めうることを指摘する。

変容する表象の意味を生むアーバスの手法は、被写体への彼女自身の態度を不明瞭にするゆえに「猶予的」といえる。またアーバス独自の表現形式は、発話者固有のスタイルが見られる次元を指す概念である「エクリチュール」の特徴をもち、かつ、彼女自身の意図する被写体像を「外に出す(Utter)」という特徴ももつことから、その手法は「発話(Utterance)」に類似しているといえる。これを踏まえ本論文はアーバスの手法を「猶予的発話」と呼ぶ。それは、被写体に対する観者自身の価値判断を自覚させる一種の自省的場となる手法である。

第二章 越境

本章では、「猶予的発話」を成立させる、撮影者と被写体の関係性を考える。両者の関係性は、メディアムの次元と表象の次元で現れる。まずメディアムの次元の形式的特徴として見出される多層的レイヤーを分解する。これを通して、多層性は、三次元の撮影空間が印画紙上に圧縮されることに起因すると解明される。そしてその圧縮を可能にするのは、撮影者と被写体の狭められた心的・物理的距離であることを明らかにする。つまり両者の親密性こそ、圧縮された画面を「多層的平面」に成立させるのである。さらに「多層的平面」は、印画紙と画面内の両方を感覚させ境目を不明瞭にすることでメディアムの次元を観者に喚起させ、画面内外を行き来する経験を可能にする。

親密性は、表象の次元において意味の齟齬を生起させる。ここで本論文は、アーバスの言う「意図と効果の間におけるギャップ」が発生する事態、すなわち「ズレ」が生ずる過程をダイアグラム化して示す。その際に表象の受容の問題として読解できるアーヴィング・ゴッフマンのスティグマの対人関係論を引き出す。被写体像は時代的・文化的文脈を持つために、異なる時代・文化の観者が写真を受容する際に齟齬が生ずる。つまり、撮影者と被写体に加え、観者自身も表象の意味の形成に参与し、表象とその読解の間に「ズレ」を生じさせるのである。その「ズレ」は、表象を決定する権威が被写体－撮影者－観者のいずれにも付与されない重層的経路によるものである。

以上の「多層的平面」と「ズレ」は、撮影者と被写体の親密性によって成立するものであり、かつ観者に作品への没入を促す働きをする。本論文はその写真経験を「越境」と呼ぶ。それは観者に対し、徐々に画面に没入する視覚的能動性を与え、現実と画面内空間との境を越えさせる。

第三章 対顔

アーバスの作品は観者の情動を湧出させる。本章では、観者の情動の湧出過程を記述することで、観者と被写体の関係性を考察する。まず、撮影者と被写体の親密な関係性の別側面、暴力性が写真経験に及ぼす影響を考える。暴力性は、撮影者と被写体の境界線を無化し、非断絶的關係を生む。

親密かつ暴力的な関係性は、「越境」の経験とともに、被写体と対峙する経験も観者に与える。ここで、観者と被写体の関係性の問題を、観者と画面の関係性に展開する必要がある。なぜなら静止した画面が、迫ってくる／見られるという客体化の経験を観者に与える基になるからだ。本論文は、その経験を「肉迫」と呼ぶ。つまり「肉迫」は、静止した画面全体の感受によるものである。

「肉迫」の経験は、メディアム的特質にも影響される。そこで、写真制作におけるアーバスの取り組みが、初期の粒子優位から中後期の質感の再現優位へと移行した点に注目する。質感の再現が、被写体の細部まで描写された写真との対峙を可能にするのだ。つまり質感の再現と画面の静止とが相まって強化する「肉迫」の経験は、言い換えれば、隅々を見届けることを可能にする画面の静止により、緻密に描写された細部の驚異が、一挙同時に観者に迫ってくる経験である。

一挙同時に迫る細部は「肉迫」の経験を、被写体像が変化し続ける写真経験に発展させる。この変化の永続性を受容するという写真経験を分析するために、ロナルド・D・レインを参照する。実存論的現象学を基に展開するレインの対人関係論は、他者を認識する際に伴われる情報量の増大が認識の継続的再構築を促すことを示している。それを応用し、観者の経験において、被写体像が循環的に再構築される事態を明らかにする。観者が画面の細部を知覚し解釈すると、また新たな細部が知覚と解釈を促す循環が起こる。そして、その循環は観者に対し、被写体像を知覚・解釈する自らの視線＝価値判断を自覚させる。このように延々と知覚と解釈が継続し、なおかつその事態に目覚める観者の写真経験を、本論文は「螺旋的覚醒」と呼ぶ。

さらに、画面－被写体の静止が認識の再構築を促すアーバスの作品は、観者に対し、十全に把握できない他者と化す被写体を向かい合わせる。本論文はその経験を「対顔」と呼ぶ。「対顔」は、永続的に変化する被写体、特にその顔を通して、理解不能な被写体の存在に直面する観者の経験を意味する。つまり「対顔」は写真を通して、他者とのつながりの挫折、つながり不能の経験をもたらす。

(都市イノベーション学府・建築都市文化専攻建築都市文化コース博士課程前期修了)